

イスラームの潰えた夢

—— 韓国における布教と現状

安田ひろみ

1. はじめに：“奇跡の国”再び

韓国では近代から現代にかけてキリスト教が勢力を急激に伸ばし、今や長らく第一位を占めていた仏教を凌駕する事実上国内第一の宗教となった。信者数は現在、公称一千万人で人口の五分之一を超え、さらに増加の一途を辿っている。東アジア、特に儒教文化圏におけるキリスト教布教のこのような大成功は他には例を見ない。一体、韓国は儒教、特に朱子学的モラルが李朝時代後期には既に民衆レベルまで浸透していたのであり、現在に至るまで祖先祭祀、チェサの永続を主目的とする父系出自集団が、個人のアイデンティティの基盤となっている儒教国なのである。儒教／チェサとキリスト教を始めとする一神教は、論理的には本来両立し得ない。にも拘らず、こうした成功を収めたことから、キリスト教側からは韓国は「奇跡の国」と言われている。

キリスト教の成功は、植民地下においては反日運動の後援者として、軍事・独裁政権下では民主化のシンボルとして、抵抗・反権力の宗教というイメージを確立し、民衆の心を掴んだことによるところが大きい。また、植民地化からようやく解放を迎えた直後の朝鮮戦争と以降の貧困、急速な高度経済成長とそれに伴う地域社会や価値観の激変といった社会変動の連続の中で、心の拠り所となる新たな宗教が求められたということもある。これに加え、現世主義でありながら“熱い”韓国人の信仰心を投影す

る宗教の形として、静的で現世離脱的な仏教よりも、社会的活動を重視し、しかも熱狂的になり得るキリスト教が好まれたと言っているかもしれない。さらに、これまでの歴史の中で支配的世界観の座を占めた仏教、儒教、そして西欧合理主義による抑圧にも拘らず、韓国人の精神的底流として連綿と生き残ってきたシャーマニズムが、合理主義との妥協という形でペンテコステ派などのキリスト教の一派に吸収された面もある。

だが、キリスト教が韓国で成功の道を辿りつつあるさなか、もう一つの世界規模の外来宗教が、一步遅れて同じ夢を追っていたことはあまり知られていない。イスラーム教である。韓国と似たような文化的背景を持つ日本で、もしイスラーム教が大々的な信者拡大を目論んだとしても、現実とかけ離れた荒唐無稽な試みという謗りを免れ得ないが、韓国では確かにその可能性を期待できた時期があったのである。キリスト教が新たな外来宗教の受容への道ならしを終えた後、その成功を範として、かつ改宗という形で信者を取り込もうとし、そして、一部では布教が実際に成功した。

韓国では1970年代、外貨獲得のために政策的に中東産油国への出稼ぎが奨励され、10万人を超える韓国人が長期の労働契約を結んで海を渡った。彼らとその予備軍が現地での生活に適應できるよう、イスラーム文化が広く学ばれ、この時期韓国と中東とのつながりは最も強くなった。こうした中、イスラーム諸国は豊富なオイル・マネーを

武器に布教に乗り出し、韓国政府の支援の下で各地にモスクが建設され、韓国人ムスリムが次々と誕生した。韓国をイスラームにとっても「奇跡の国」にしようとの野望であったともいえる。

中東出稼ぎブームもとうに終わり、経済的に豊かになった現在の韓国では、イスラーム文化への関心も薄れている。現在、韓国のムスリム人口は、公称35,000人とされ、このうち韓国人ムスリムはわずか7,000人で、新たにイスラーム教に入信する韓国人はもはや極めて少ない。その代わりに、今度は韓国マネーを目的に出稼ぎに来たイスラーム諸国からの労働者が、韓国のムスリム人口を増やしている。在韓ムスリムの95%が労働目的で入国したパキスタン人といわれるが、大部分が不法滞在である彼らは、公式には見えないアンダー・グラウンドの存在だった。だが近年では政府の外国人労働者政策の緩和もあり、いよいよその数を増やしている。結局、韓国のイスラーム化は実現しなかったが、日本よりもはるかに強力に単一民族神話が根付いていた韓国が、今後ムスリムと共存できる国になっていくのだろうか。

本稿では、歴史的な韓国とイスラーム文化との関わりを記した後、70年代に独力で一村700人全員をイスラーム教に改宗させたといわれた伝説的韓国人ムスリムのケースを中心に、現代韓国におけるイスラーム教布教の顛末とその後を紹介する。

2. 歴史の中のイスラーム

<三国～統一新羅時代>

朝鮮半島の国家とイスラーム諸国とのファースト・コンタクトがいつだったかは定かではないが、アラブ側の記録に現れた最初の事例は統一新羅時代とされる。以下に、漢陽大学の李熙秀教授の論文から、朝鮮半島とムスリムとの交渉史を簡単に紹介する。

5世紀から6世紀の慶州の古墳からは、

アラビアやペルシャのガラス製品が出土しており、直接にせよ間接にせよ既にイスラーム諸国との交流があったことが伺われる。統一新羅時代後期（A.D. 668-935）には、アラビア商人が朝鮮半島との接触を試みたようだ。航海に巧みなムスリムは、8世紀には中国の南島沿岸部に Fan-Fang と呼ばれる一種の租界を建設、唐の政府から任命されたクァディ、シェイクなどと呼ばれるムスリムの長が、イスラーム法に基づいて統治していたという。Fan-Fang は租界というより植民地といった規模に成長していったようで、9世紀には中国女性と結婚するなどして定住したムスリムが100,000人を超えていたとされている。半島南部とは海路で2,3日のこうした拠点を通じ、政治的にも文化的にも唐と緊密な関係を持っていた新羅とムスリムの接触があった可能性は十分に考えられる。

だが李熙秀教授は、新羅とムスリムと交渉はこれだけでなく、おそらく複数のチャンネルを通じて行われていたと述べている。①アラビア—インド—マライ—中国間の南海貿易を支配していたムスリム商人と、中国—朝鮮—日本間の東アジア貿易を牛耳っていた新羅商人との商業的協力、②唐の宮廷を外交、通商目的で定期的に訪れていた新羅の外交使節と、長安のムスリム住民との政治的接触、③唐への新羅人留学生とムスリム留学生との文化的交流、④中国と西域を訪れた新羅の仏教僧たちとムスリムの宗教的交流——の4つである。

即ち政治・経済・文化・宗教次元での多角的な交流というだけでなく、ルートとしても海路のアラビア商人のみならず陸路の中央アジアのムスリムが考えられる訳で、地理的条件からも同時期の日本よりも遥かに濃密なつながりがあったといえよう。

イスラーム側には9世紀から16世紀の朝鮮に関する記述を含む多数の地理書、歴史書、旅行書などが残されているが、中でも興味深いのは885年のイブン・ハルダドビ

一の地理書で、偶然到達した「黄金郷」新羅にムスリムが定住したとの記述がある。9世紀頃新羅に定住したムスリムについては、マスウーディーやイブン・ラスターなどの著作にも断片的な記述があり、彼らが新羅社会に同化したと述べている。

また、三国史記や日本書紀などの記述では、アロエ、ゴマ、アルファルファ、石榴、葡萄、ペパーミント、龍涎香、駱駝といったアラビア、ペルシャ、中央アジア原産の品々や楽器、舞踊、音楽などが百済、高句麗、新羅にもたらされたとする他、ソグド人商人の百済来訪などにも触れている。

<高麗時代>

10世紀になり新羅は高麗に滅ぼされるが、高麗は海外貿易に力をいれ、東南アジアと中国との貿易に活躍していたムスリム商人たちと商業的関係を強めた。高麗史によれば、1024年、「タシ」と呼ばれる商人100名が初めて高麗の宮廷を朝貢貿易のために訪れている。タシはペルシャ語でアラブ商人を指すタジールまたはタジであり、以降彼らとの交流は、半島西岸の島を中国・日本・高麗・アラブの国際交易の拠点に活発化していく。11世紀の高麗—アラブ交易は、アラブ世界からの没薬、水銀、琥珀、スパイス、薬品原料などを、高麗の金銀、絹や亜麻製品と交換するものだった。経済活動以外では、アラブ人を含む外国人たちが国家安泰を祈願する宗教行事である八関会に招かれたとの興味深い記録があるものの、この時期、高麗においてイスラームの布教や紹介が行われたかどうかは、定かではない。

高麗が元に支配された時期以降、朝鮮半島はより直接的なイスラーム文化の影響を受けることになる。元の影響下、高麗史には「回回人」と記されているモンゴル人やウイグル人等トルコ系を中心とする中央アジアのムスリムは、地方及び中央の政府に入り込んでいた。元の侵略が始まった1230

年代に、高麗の首都である開城には既に多数のムスリムが住んでおり、元と高麗の関係が正常化した1270年以降は、全国に住むムスリム移民や商人は相当数に達していたらしい。1274年には政略結婚によりフビライの娘である元の斉国王女が忠烈王に嫁したが、ムスリムは宮廷に大きな影響力を持つようになっていた。彼らは開城やその郊外にコミュニティを持ち、民族衣装を纏って独自の祝祭を催しイスラームの戒律や慣習を守り、禮宮と呼ばれるモスクも有していた。コミュニティは宗教指導者によって、イスラーム法に基づいて治められた。宮廷行事に招かれ、クルアーン（コーラン）詠唱を披露したり、国家の安泰と王の長寿を祈祷したりすることもあった。

韓国では、「沙耶哥」など秀吉の朝鮮出兵時の帰化日本人や、孔子、諸葛孔明といった中国人を祖とするなど外国系のルーツを持つと称する幾つかの氏族が現在でも存在するが、元系を自称する氏族の祖にはこの時期の定住ムスリムもいる。斉国王女に随行して高麗に来た多くのムスリムの中には、定住して高麗の高官になったものもあり、斉国王女の侍従だったウイグル人ムスリム三哥は度々王の使節として、大都に派遣された。彼は王より張舜龍という名を賜り、現在の徳壽張氏の始祖となったとされる。忠宣王時に西京（現在の平壤）の存撫使に任命された閔甫も、ムスリム官僚の代表的な例である。

<李朝時代>

李朝時代になっても当初はムスリムとの濃密な関係は続き、李朝実録にはイスラーム僧が帰化して官僚になった記事がある。また、ムスリム住民には国家から給費があり歳出を圧迫していたという。彼らは戴冠式を含む宮廷行事に参加する資格を得ていたようで、地位の高さが伺える。政府・司訳院の外国語試験科目にはウイグル語が含まれていた。また、李朝初期には水時計、

日時計、天球儀、降雨計等、様々な科学的発明が相次いだが、多くはイスラームの天文学や気象学の知識を基礎とするものだった。イスラーム薬学や医学の知識ももたらされた。この時期のイスラームの影響の代表例は、世宗の七政算外篇（ヒジュラ暦の採用）といわれる。従来の誤差の多い中国暦から純陰暦のヒジュラ暦採用で、農業の発展が大きく促進された。

だが、1368年には元が明に倒されて漢民族の中国が復興、儒教が支配的思想に返り咲き、イスラームを優遇する対中国外交上の必要性はなくなった。特に15世紀以降、李朝は儒教中心・外国文化抑圧政策に転じ、イスラームの力は急速に衰退していく。1427年の世宗の勅令でイスラームの儀礼や民族衣装の着用も禁じられた。さらに1636年に清が明を滅ぼした後、李朝は明の思想的正統の後継者を自任して小中華主義を取り始め、ムスリムへの弾圧がより強化された。15世紀から17世紀の大航海時代に、ムスリム商人を駆逐したヨーロッパ商人が海上貿易の覇者の座を占めるようになり、世界的な政治秩序が一変したこともあり、朝鮮に定住していたムスリムはいよいよ影響力を失い、次第に国民と同化していった。

3. 現代韓国におけるイスラーム布教

<大韓帝国および植民地時代>

韓国へのイスラームの最初の布教は、19世紀後期オスマン帝国のスルタン、アブドゥル・ハミド2世のミッションによるものである。ヨーロッパ列強の侵略に対抗する汎イスラーム主義の理念に基づき、彼は自らクァディス、ウラマー等宗教指導者や教師を選び、布教団を北アフリカ、バルカン半島、インド、トルキスタン、ジャワ、中国、日本、大韓帝国に送った。なお、この時期には日本でも初の日本人ムスリムが誕生している。日露戦争以後トルコと日本との親交が深まっていたが、1887年に小松宮

彰仁がアブドゥル・ハミド2世と会見し、その答礼として1890年に派遣されたエルトグロール号が南紀沖で遭難した。生存者をイスタンブールに送還する軍艦比叡に義捐金を集めて同乗したのが、初の日本人ムスリムの一人、山田寅次郎であった。

トルコのミッションから大韓帝国を訪れたのは、トルキスタンのロシア人汎イスラーム主義者、アブドゥルラシッド・イブラヒム・エフェンディで、日本での布教の間に10日間当地で布教活動を行ったが、大きな成果は得られなかった。1940年代に彼は日本に併合された朝鮮を再訪している。

その後のムスリムとの接触は、日本にも難民として大勢が渡来していた、ロシア革命以後のボリシェビキの弾圧から逃れたトルコ・タタール系ムスリムとのものだという。1920年代には、約200人の難民が朝鮮に移民した。これ以前にも、中国との国境から多くのムスリムが行商人として南下していた他、1930年代まで満州や、関東大震災の被害を受けた日本からの定期的なトルコ系移民が、半島各地に入植していた。彼らは日本政府から身分と活動を保障された商人であり、地域的な交易に従事していたが、イスラームのコミュニティとして結束しており、ソウルに宗教的拠点としての会館を有していた。1932年イスラーム教に改宗した朴ジェソンは、この時期の韓国人ムスリムの草分けである。彼はトルコ人の仕立屋の従業員で、改宗後にトルコ女性と結婚している。1930年代は半島部でのムスリムのコミュニティの規模の小ささから改宗者は少なく、むしろトルコ系ロシア人が多く植民しモスクもあった満州の方が、改宗者が多かったらしい。だが、解放後の政治的混乱や朝鮮戦争のため、韓国に定住していたトルコ系ムスリムは、1950年以降にはほとんどアメリカやカナダ、豪州、トルコなどに移住してしまった。

<朝鮮戦争後のトルコ人による布教>

現代の韓国民に布教が始まったのは朝鮮戦争時、国連・多国籍軍の一員として韓国を支援したトルコ軍からである。トルコ政府の世俗政策上、宗教活動は禁止のはずだったが、止むに止まれぬ宗教的熱情から、1955年から二人のトルコ人イマームがトルコ政府の特別許可を得て、基地周辺の住民に布教していたらしい。従軍イマームのA・カライスマイルオールとZ.コチュである。当初はトルコ軍基地を自ら進んで訪れた韓国人のみを対象にするという条件で、イスラームについての講義が始まった。通訳だった金ユド、金ジンキュ、尹ドウユンが当時のムスリム第一世代である。彼らはソウルに毎週末、カライスマイルオールを招いてイスラームについての講義を行い、1956年にコチュがカライスマイルオールの後任として赴任して以降、さらに活発に布教活動が行われた。彼らは「アンカラ学校」と呼ばれた戦災孤児の救済施設を設け、養育と教育に当たるなど、献身的な支援を行っている。彼らの尽力でソウルに仮設モスクも建立され、1957年には韓国人ムスリムの数は208人になっていた。その後、韓国のイスラーム社会は、マレーシアのアブドゥル・ラーマン首相を始め、パキスタンなどアジアのイスラーム国家の支援を受けるものの、いかんせんイスラームへの社会の関心も乏しく、外国人を除くと、信仰の厚い少数の韓国人が細々と維持するといった状態で推移していった。1967年には韓国イスラーム財団が設立され、ムスリム社会を公的に代表する機関として機能し始める。

< 転機となった中東出稼ぎブーム >

次の大きな波は、1970-80年代の中東への出稼ぎブームである。73年のオイル・ショック後、韓国政府はアラブ諸国との友好に目を向け始め、貿易収支赤字への対策もあり、外貨獲得の手段として中東への出稼ぎを奨励した。まだ賃金水準が低かった時代であり、高収入にひかれて多くがこれに

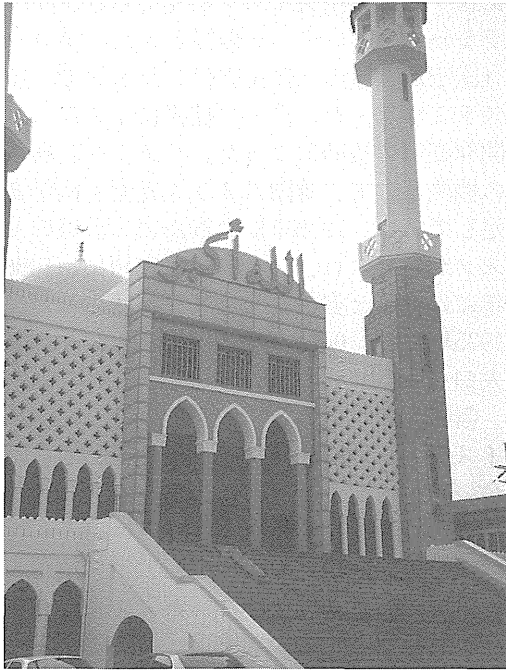
応じた。熱砂の現場でも勤勉に働く韓国人労働者は優秀な労働力として高く評価され、結果的に10万人を超える人々が主として建設労働者として中東へ渡った。

ところで韓国人労働者たちは、形式上イスラーム教徒として入国したが、その一部が本当にイスラーム教に帰依したのである。現在全国に5つあるモスクのうち、1976年にはソウルの中央モスクが建てられ、イスラミック・センターが開設された。モロッコ国王が資金の一部を寄付したもので、イスラミック・センターの拡張はイスラーム開発銀行の援助による。イスラーム布教の機関として、韓国ムスリム連盟も同年発足している。1979年には釜山に二番目のモスクが建てられ、1981年には広州に、1986年には全州と安養にもモスクが誕生した。1975年に5,000人だった韓国人ムスリム人口は1979年には10,000人に達していた。

信者人口を見ると、他の大宗教と比べ、イスラーム教は如何にも小規模である。だが、韓国においては、イスラーム教は政治的な優遇を受けた特殊な存在といえる。70年代の外貨不足の時代、当初アラブ諸国と正式な国交のないまま、10万人を超える韓国人労働者の大規模な中東への出稼ぎが続いた。また中東地域は、オイル・マネーを背景に韓国製品の輸出先としての役割も少なくなく、イスラームに対し、韓国政府は様々な優遇政策をとったのである。70年に建立された中央モスクを始め、釜山、広州、全州、安養の全国5ヶ所のモスクの土地と「韓国イスラーム大学」（未開学）の敷地は、韓国政府から寄付されたものである。なお、モスク建設資金はカタール、クウェート、サウディ・アラビア、モロッコ、リビア、エジプト、イスラーム開発銀行などの寄付によるが、安養モスクのみは韓国人イマームである故ユ・チャンシク師の私財によっている。

＜イスラーム団体の活動＞

現在イスラーム関係団体は、ソウル・梨泰院の Seoul Central Masjid (中央モスク) に隣接する Korean Muslim Federation 及び Korea Islamic Center、韓国イスラーム教中央会などがある。イスラーム紙 Korea Islam Herald も創設されたが、現在では廃刊になっている。



ソウル中央モスク (梨泰院)

韓国イスラーム教中央会は韓国におけるイスラーム教を代表する中央組織である。2001年に同会の李周和事務次長に面談調査を行ったが、調査を行った時期は、米国での同時多発テロの影響が懸念された。だが、韓国でのイスラーム教の規模の小ささなどもあり、特に一般市民からのイスラーム教への反感等は見られないという。だが、テロ発生後には、行政自治部長官、警察庁長官等が直接同会を訪れ、万一排斥運動やデモなどが行なわれた場合の保護を約束した。現在の教勢は確かに盛んとはいえないが、オイル・マネー、今後の人口規模などから、将来の教勢拡大には大いに期待が持てると

語っていた。他の宗教との関係については、全ての宗教と現在友好的関係を保っており何ら問題はないとのことである。もっとも、韓国内のムスリムの圧倒的多数は、前述のように外国人であり、不法滞在者を含めるとその比率はさらに拡大する。そのため、イスラーム中央会の活動は、モスクの運営やムスリム子弟への宗教教育を除けば、傘下団体を通じてのイスラーム教、イスラーム文化の韓国市民への啓蒙事業などが主である。宗教活動以外では、ムスリム労働者の権益保護があげられる。

日本同様、韓国でも経済の急進と共に外国人労働者が流入し、国内ムスリムの相当部分が合法・不法の外国人労働者によって占められている。韓国ではこうした弱い立場の不法滞在労働者への雇用者の不当労働行為や甚だしい暴力行為などが、一時は社会問題にもなった。イスラーム中央会は、小規模ながら宗教活動と共に彼らへの福利厚生や法律・医療相談などの活動も行っており、今後ムスリム労働者を対象とする福利厚生施設や宗教センターの建設を計画しているという。イスラーム大学建設と共に、ムスリム墓地の設置も長年の懸案事項である。

中央モスクのある梨泰院周辺にはイスラーム関係施設が集中しており、トルコ料理やパキスタン料理のレストラン、ハラール食品やムスリム顧客向け雑貨等の販売店などもある。こうした店舗はムスリムの情報センターとなっている。ハラールショップである「タージ・マハル・ミート・ショップ」で Repon Uddin 氏 (バングラディッシュ人) に、ソウルの外国人ムスリム社会と韓国人ムスリムとの関係を尋ねたが、後者の少なさから接点はあまりないようだ。彼は韓国語が堪能な数少ない外国人ムスリムだが、「韓国人ムスリムは五柱六信を守っていない」、特に豚肉を食べるなどの点で、正当な信者としては承認できないと述べて

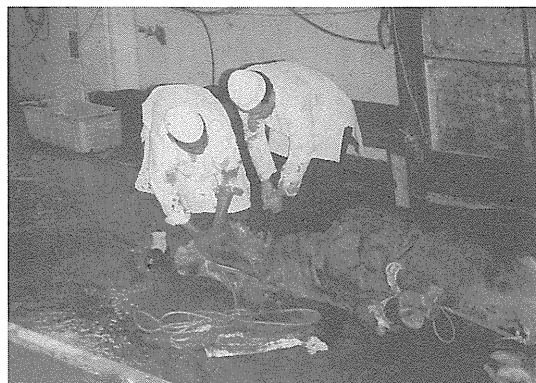
いた。一般の外国人ムスリムの場合、韓国語が全く出来ない者がほとんどで、韓国人ムスリムとの交流はほぼないとみていだろう。インド・パキスタン・レストラン「ムスリム」はその典型例で、外国人ムスリムのみを対象とした店である。一方、トルコ・レストラン「サラーム」はトルコに留学した韓国人の経営で、宗教性は特になく、ムスリムではなくエスニック・フード愛好家を対象とした店である。

広州市では、同市のハラール・ショップ「Jasper Co.Ltd.」で、KHMA（広州外国人ムスリム協会）会長の Muhanmmad Saleem Yasin 社長、梨泰院の同業「Moghul」の M.Riaz Dar 社長（共にパキスタン人）と面談、この地域のムスリム事情を聞いた。だが、やはり一般韓国人との接点は仕事を除いてほとんどなく、韓国語を習得している者はパキスタン人のイマームのみであった。

4. 外国人労働者の急増

ソウルの衛星都市であり、工場地帯である広州は、不法在留外国人のサンクチュアリの一つである。ロシア、中国、ベトナム、ウズベキスタン、コロンビア、シリア、イラン、イラク、ブルキナファソ、ガーナ、バングラディシュ、インド等、あらゆる国籍の不法滞在者が堂々と暮らしている。ここには中国人の自助グループを始め、様々な民族のコミュニティがある。

時には市内バスに乗ると、運転手以外、乗客は全員外国人などということもあり、韓国ではなかなか見られない風景が広がる。広州にはムスリムだけでも約2,000人の外国人が居住しているが、そのほぼ99%が不法滞在だという。現在韓国では外国人労働者に関する政策を変更しつつあり、政府は昨年、3年および5年以下の不法滞在者で十分な条件を満たした者には労働ビザを発給すると発表した。



韓国内でもイスラームに則ったやり方で屠殺が行われている。

日本ではオーバーステイの外国人は見つけ次第強制収用され、ほとんどが強制送還されるが、韓国では驚いた事に全く問題がない。もちろん入国管理法上は昨年まで全員違法だった訳だが、実際にはほとんど黙認されていた。法改正後の現在でも、依然不法滞在者はほぼ黙認されている。こうした政府の態度は、3K労働力不足への対処と低賃金労働力の確保のためだが、これには次のような社会・文化的及び経済的な背景がある。

まず、職業の貴賤意識である。韓国では儒教の影響から労働を賤視する一般通念があり、近年少しずつ変わってきているものの、依然職業が「身分」的な意味合いを帯びている。まず政治家や医師、弁護士、大学教授といった知的労働の専門職、次にいわゆるホワイト・カラー、そしてブルー・カラーといった序列は日本と同様だが、たとえ経営者でもレストランや美容院のような「人に仕える」サービス業は疎まれ、こうした事業で成功すると業種自体をもっと「格の高い」ものに変えてしまうことも少なくない。可能な限りこうした社会的な階梯を上って行くことが理想であるため、何代も続く老舗や職人を家業とする家系などは、ほとんど全く存在しない。中でも最も嫌がられるのが3Kの肉体労働である。このため、最底辺労働を次第に不法滞在外国

人が占めるようになり、現在では韓国の工場、特に中小企業では、事実上外国人労働者がいなければやっていけない状況になっている。

次は、労働市場の構造の変化である。韓国は先般の経済危機を順調にクリアしたという印象を持たれているが、実際にはIMF管理を脱するため、企業は極端な合理化をせざるを得なかった。特に人件費削減に関しては、半数以上の労働力を「不正規雇用」にすることで解決した。韓国人のこの種の労働者は、同じ内容の労働に対し、何年経っても昇給やボーナスがない結果、大卒でも正規労働者の半分以下の賃金しか貰えない（月額約5万円～10万円）し、身分的にも極めて不安定なのが実情である。彼らはこうした状況を改善するため、デモや訴訟を起こして社会にアピールしているが、経済成長を優先する政府は、救済に極めて消極的である。この方針は金大中政権から、盧武鉉政権になっても変わらない。不正規雇用という形態は民間企業のみならず、官公庁や国・公立団体でも採用され、底辺の労働市場の低賃金化が進んでいる。

例えば昨年、ある国立大学で、法定最低賃金（月額5万円弱）以下の待遇で清掃員を雇っていたのが発覚し、問題になったが、「待機や休憩時間が長く、労働時間は8時間に満たない」（実際はその間も働かされる）と称するなどの抜け道がいろいろあり、結局待遇が改善されることはなかった。こうした不正規労働者の存在が賃金水準を引き下げている結果、最底辺に位置する不法滞在の外国人労働者の賃金はさらに押し下げられ、中小企業にとっては格安の労働力として、なくてはならない存在になっている。

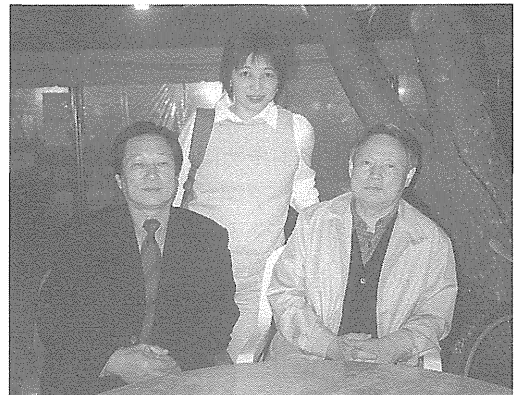
このような状況から、政府は入国管理法を事実上棚上げするような方針を採ってきたのであり、外国人労働者の入国はいよいよ増えて行っているのである。

5. 伝説的韓国人ムスリム、田得麟氏

Muslim Peoples: A World Ethnographic Survey には、全村がイスラーム化したという京畿道の双領洞（サンリョン村）に関する記述があった。これによると、洞民約700名、123世帯の全てがムスリムだという。当時から約20年が経過した現在、同洞がどのような状況になっているかの追跡調査を予定していたが、周辺の都市化・人口増大による市町村統合・合併で同洞は広州市に吸収され、消失していた。

現在では旧村落地域との境界も定かではないが、広州市の人口約12万人中、依然約700人が韓国人ムスリムだという。但し、韓国人ムスリムは既に第二世代に入り、他方、外国人ムスリム労働者が移入するなど、その内情は変動している。

ここでは、双領洞への布教を独力で行なった、広州モスクの田得麟イマームへのインタビューの内容を記して、韓国におけるイスラーム事情を知る一助にしたい。



田得麟イマーム(右)。モスクの創設メンバーの1人と。

< 劇的な回心から農民への布教 >

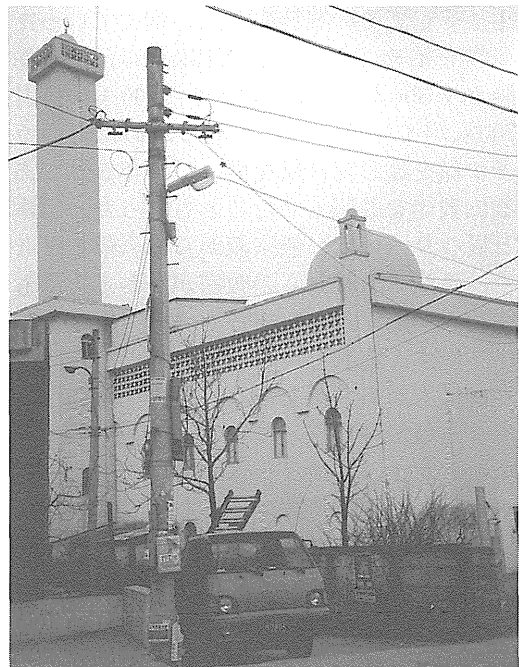
当時68歳の田氏がイスラームに帰依したのは既に人生も半ばを過ぎた42歳の時だった。田氏は1935年、平壤の長老派キリスト教信者の家庭に生まれた。現在の北朝鮮に当たる地域には敬虔なプロテスタントが多く、

朝鮮動乱時、無宗教の共産主義を嫌って南下した者も少なくなかったが、田氏の家族もそうである。以後キリスト教徒として育ち、キリスト教徒と結婚した。三男一女に恵まれて広州で高校教員をしていた1977年、転機が訪れた。ちょうど学生課長をしていた折、中東出稼ぎブームが始まったのである。当時は中東に韓国人労働者を送り出し始めた時期であり、実用的な見地からイスラーム文化やイスラーム教への知識が求められていた。同校でも卒業後の進路として中東行きは魅力的な選択肢の一つであり、エジプトからシュレイマン博士を招請し、イスラームに関する連続講義を依頼した。これは生徒1,500名、教員200名、一般市民300名が参加した大規模な講座となった。

だが、当時韓国はイスラエル大使館を置いていたため、中東各国はこれに反発して韓国との国交を拒否していた。国交のない国からの訪韓者の言動は、招請者が全て警察に報告する義務があり、学生課長の田氏がシュレイマン博士の講義内容を毎回報告書にまとめて提出した。これが田氏のイスラームとの出会いである。実は田氏は高校生の時から、キリスト教の教義に疑問を抱いていた。旧約の選民思想やアダムの原罪を子孫が荷わされるのは、キリスト教が否定する不寛容、不平等ではないのか、予定説は自由な人間性の否定ではないのか等である。彼はこうした疑問がシュレイマン博士の講義で全て氷解したとし、直ちにイスラーム教に改宗、即座に高校を退職してサウディ・アラビアに4ヶ月間留学し、イスラーム教を学んだ。以後、インドネシアやトルコ、クウェートなどでも学び、メッカ巡礼も2回行なってハジになっている。その間、家族には退職金で生活させたという。

帰国後の78年から双領洞への布教を開始するが、当時の人口123戸、400名中、1年以内に300名がイスラームに改宗した。他の村でも改宗者が続出し約400名になったという。

即ち、前掲書の記述通りの全村イスラーム化ではなかったが、約700名を改宗させたというのは事実である。イスラームにほとんど馴染みがない韓国において、このような驚異的な布教が成功した理由は、当時の幾つかの社会的背景に求められる。一つは経済的な問題である。70年代後半は大都市と地方農村との収入の格差が極めて甚だしかった時期であり、経済成長と共に益々その差が開いていた。中東出稼ぎは社会的要請ともいえ、そのために必要なイスラームに関する啓蒙活動は歓迎された。出稼ぎ者はムスリムのみが認められ、名目的とはいえ改宗する必要があったためである。二つ目は宗教で、当時はキリスト教が地方にも急速に勢力を拡大していた。三つ目は教育問題である。韓国では教育熱心な儒教的伝統に加え、大卒者と高卒者以下の賃金格差が極端に大きいこともあり、当時は教育熱が加熱し始めていた。現在の学歴社会に至る途上であり、親たちは高い費用を掛け、



地域のイスラーム・コミュニティの中心になっている広州のモスク。

「課外」といわれる塾に子供を通わせたり、現職の教員に家庭教師を頼むなどし、政府の規制と教育業者らがイタチごっこを繰り返していた。

だが、双領洞のような非常に貧しい農村では、教会に通っても献金が出来ないため肩身が狭く、塾に子供を通わせる金もなかった。ますます成長を続ける韓国社会の経済的な繁栄を尻目に、このままでは学歴の低い子供たちも親と同じ貧しい農民として終わるしかないといった焦燥感、絶望感が村に蔓延していた時に、全氏の布教が始まった。元高校教師という前歴を生かし、彼は村にテントを張って夜間に無料で子供たちに勉強を教え、優秀な生徒にはイスラーム諸国の奨学金を申請し、インドネシア、マレーシア、サウディ・アラビア、イラン、英国、米国等に留学させた。その数は56名に上るといふ。また、先方からの要請で1日に5～6校の小・中・高校を回り、イスラーム教と中東についての講演を行なった。その結果、まず4人の教員が改宗、以後生徒、そしてその家族の改宗が増えていった。布教を始めて一年で、人口約400人の双領洞から300人、他の地域から400人の、計700人がイスラームに入信したのだという。子や孫を通じて信頼を得、二十年かけてある仏教徒を改宗させたこともあった。日本と異なり（ほぼ）無宗教からの入信ではなく、キリスト教からの改宗が多かったのも成功の一因だろう。中でもキリスト教を分かりやすく批判し、イスラームの優を説く方法は人々の共感を得た。信仰の名の下の単なる金集めに堕したキリスト教の牧師が多かった中、イスラームでは聖職者はおらず、イマームも無償で働くという姿を常に見せていたためである。また、この地域から中東に出稼ぎに行き、帰国した労働者の10%ほどが、本当にイスラーム教に帰依しムスリム人口に加わった。

81年には帰国留学生や中央モスク、キューブからの寄付でモスクの建立も実現した。

その際には、広州のキリスト教界は危機感を強め、これ以上イスラーム教が広がらないようにと、モスクの周囲の四方に包囲陣のように四つの教会を建てたほどだった。モスクの建立はパキスタン、バングラディシュ、イラン、モンゴル、インドネシア等からのムスリム労働者や彼らを顧客とする外国人ムスリムも引き寄せ、現在約800名の外国人ムスリムが広州市に居住する。

田氏の家族については、夫人もイスラームに改宗し、三男一女のうち、長男と三男はインドネシアのバンドン大学、次男はトルコのボスポラス大学とイスタンブール大学、長女もマレーシアとインドネシアに留学に送り、家族全員がムスリムになった。費用は全てイスラーム各国政府から支援を受けたという。

<外国人主体になった広州のムスリム社会>

豊富なオイル・マネーをバックにし、時代的にも追い風を受けていたとはいえ、田氏の活躍は正に超人的で、伝説的ムスリムという名にふさわしい。果たして「全村イスラーム化」ではなかったものの、700人入信という数字も事実だった。だが、この数字は年々逡減しており、双領洞が市町村合併で消滅し都市開発が進んだ現在、ムスリムの集住地域といえるものもない。残念ながら「韓国のムスリム村」はやはり幻だった。

二世、三世の時代になっている広州の韓国人ムスリム社会は、現在厳しい局面を迎えている。結婚問題である。ムスリムはイスラーム教信者としてしか結婚できないが、現実には相手がいらない。改宗してもらおうとしても、そうはなかなかうまくは行かない。仕方なく、結婚後イスラーム教に改宗させるという条件で異教徒と結婚することになるが、これが往々にしてミイラ取りがミイラになってしまうのだという。つまり、ムスリム女性が夫を改宗させるのは婚家との力関係上もともと極めて困難である。男性

のほうはまだ可能性が高いものの、現実にはキリスト教の女性と結婚した男性は、子供の誕生などを契機に、妻の説得で逆にキリスト教に改宗させられてしまうことが多いのだという。

韓国社会が豊かになり大学進学や留学も自力で可能になったことに加え、原理主義者のテロなどでイスラームへの偏見が増している中、マイノリティとして生きることを選択するには、個人の強い信仰がなければ難しい。二世、三世ではおぼつかないということなのだろう。一方、個人の信仰で入信した一世たちは老齢化し、年々死亡していく。現在のモスクは増えつづける外国人ムスリムが主体となっている。人口12万の広州市には、パキスタン、バングラディシュ、イラン、モンゴル、インドネシアなどから来た多くのムスリムがいる。不法滞在者を含めると約2,000名になるという。広州市にはハラール・レストラン1軒、ハラール・ショップ2軒が営業している。一昨年、一部が合法化されたものの、彼らのほとんどが不法滞在労働者だったため、法的な保護がなく日本と同様雇用主に搾取されたり、労災や健康保険に加入できないため、怪我や病気でたちまち困窮することが多かった。特に韓国では、外国人労働者に対する雇用主の暴行や賃金未払いが社会問題化するほど頻発している。

こうした事態に対し、田氏の活動は韓国人への布教から、イスラームの相互扶助の精神に則り外国人ムスリムの保護に変化している。外国人ムスリムの中から240人のインテリやコミュニティのリーダーを集め、彼が設立した「ムスリム外国人労働者協会」では、失職者への職場の斡旋や逮捕者への法廷通訳、賃金未払いや雇用者の暴力への対処、死亡時のイスラーム式の葬儀などを行っている。中でも出色は医療サービスで、田氏が奔走して広州地域医師協会の協力を取りつけ、協会が発行する治療依頼書を持参すれば医療費の半額を免除しても

らえるようにした。これは全国的に見ても画期的なシステムである。

外国人ムスリムの中には孤独や貧困からギャンブルやアルコールに溺れたり暴力沙汰を起こす者もいるが、犯罪に至る前にこれを未然に防止するのも協会の仕事だという。同地域のムスリムはマイノリティとして、宗教としてよりも社会的活動の単位として纏まっているという色彩が強いといえるかもしれない。

一昨年の法改正で韓国は一応、名実共に外国人との共生の時代に入ったが、相互扶助を旨とするムスリム社会からこれを実現していこうというのが、田氏の現在の目標である。「韓国人ムスリム村」は見ることには出来なかったが、「内外ムスリムの共生の町」を今後調査できればと筆者も考えている。

*本稿は、文化庁文化政策課からの委託調査である「海外の宗教事情に関する調査」(2001～2002年)及び、2003年度「京都文教大学海外出張助成金」により、筆者が大韓民国ソウル市と京畿道広州市で行った調査に基づく。

<参考文献>

- R. Weekes ed., *Muslim Peoples, a World Ethnographic Survey*, Greenwood Press, 1984
- Hee-Soo Lee, *Islam in Korea, Its History and Present Situation*, Annals of Korean Association of the Islamic Studies, vol.4, 1994
- Hee-Soo Lee, *The Advance of Muslims to the Korean peninsula and their socio-economic activities in mediaeval age*, Korea Journal of Islamic Culture, vol.IV, 2000
- Korean Muslim Federation, Report on Present Situation of Islam in Korea, 1999
- 「한국의 종교⑩이슬람교」月刊 『중앙 WIN』 pp.231-pp.247 中央日報社、1998
- 小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、1988

Islam's Wasted Dream : Its Propagation and Present Circumstances in South Korea

Hiromi YASUDA

The recent history of religion in South Korea has seen a rapid increase in the influence of Christianity, which today has surpassed the establishment faith of Buddhism to become effectively the nation's biggest religion. The number of believers is officially put at 10 million, representing over a fifth of the population, and the number is still growing steadily. There is no comparable case in the Confucian-dominated zone of East Asia, and in Christian circles South Korea is thought of as a 'miracle country'.

The success of Christianity owes much to its image as an anti-establishment faith: a symbol of resistance both against the Japanese in colonial times and against the authoritarian military regimes of the postwar decades. This image helped Christianity to win the hearts of many Koreans. It won further converts as a new source of inspiration for those battling poverty during the Korean War and the following years, and for those struggling to come to terms with the dramatic changes in regional society and cultural values that attended the following period of rapid economic growth.

However, it is not widely known that during Christianity's triumphant progress into South Korea, another world religion arrived in the country, one step behind Christianity but with the same dream of winning mass converts to its cause: Islam. In Japan, which exhibits a somewhat similar cultural background to Korea, any attempt at a campaign of mass conversion to Islam would inevitably be greeted with derision as being out of touch with social realities. In South Korea, however, there was a time when such a project did not seem so unrealistic and in some areas, Muslim proselytizing did in fact meet with a degree of success.

During the 1970s the government of South Korea actively encouraged migrant workers to take jobs in the oil-producing countries of the Middle East, as a means of raising foreign currency. Over 100,000 Korean workers eventually traveled there on long-term labor contracts. To prepare them for life in the destination countries, the government promoted the study of Islamic culture, and ties between South Korea and the Middle East became stronger than ever before. At this point the Islamic countries of the Middle East, armed with an ample supply of oil money, set out on a proselytizing program in South Korea, building mosques in various parts of the country and converting quite a number of Koreans. Behind this program lay the ambition to turn South Korea into a 'miracle country' for Islam as it already was for Christianity.

Today the boom in migrant labor to the Middle East is long over, and South Ko-

rea has itself become a wealthy country. Interest in Islamic culture has faded, and although there are still officially said to be 35,000 Muslims in South Korea, there are very few fresh Korean converts. Instead, in an ironic reversal of economic fortunes, the ranks of Muslims in South Korea are being swelled by migrant workers from Islamic countries who are attracted to work in Korea by the wealth of what is now one of Asia's richest countries. Most of them are residing in South Korea illegally, and until recently they were an officially ignored underground presence. However, in recent years the government has eased its policy on foreign migrant workers and their numbers have started to increase substantially. Hence although the dream of an Islamized Korea never came to pass, it may be that South Korea will become a country that is at least able to live in harmony with Islam.

This paper examines in some detail the propagation of Islam in South Korea and subsequent developments, focusing on the case of a legendary Korean Muslim who, during the 1970s, is said to have single-handedly converted an entire village of 700 people to Islam.